

第二次 入学試験問題

国語

函館ラ・サール中学校
2021. 2. 3

〔問題一〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

悪口はもちろん、現代のやさしさ社会に特有のものではありません。どんな時代のどんな社会でも、ひとびとは悪口を言ってきました。ときにはうわさ話として、ときにはスキヤンダルとして、ひとびとは悪口をはいてきました。また、かつての日本には、日常話される悪口とは別に、「文化としての悪口」が存在していました。

たとえば、山本幸司『悪口』という文化』（平凡社）によると、江戸時代、宮城県の塩竈神社には「ザットナ」という行事がありました。毎年陰暦の一月一五日の夜におこなわれます。町ごとに子どもたちがあつまって、ふだんのおこないの悪い住人の家までやっていると、そのひとの悪口を声をそろえて叫ぶのです。ほかにも「悪口祭」と呼ばれる祭が全国各地にはあったとのことです。地方によって祭のおこなわれ方は異なりますが、だいたいは決まった日の夜、神社にひとびとがあつまって、闇夜にまぎれながらたがいに悪をつくのだそうです。

さて、ザットナ行事や悪口祭はなぜ存在したのでしょうか。たまつたうつぶんを晴らすため、憎悪の対象をやつつけるため、たんなる娯楽、といういろいろ考えられます。『悪口』という文化』の著者の山本は、行事や祭の日に悪口をおおつびらにはくことが、共同体の秩序を守り、紛争を解決することにつながっている、と主張します。事実、家の前で悪口を言われた住人は、秘密が町中に知れわたってしまうので、以後、行動を慎むようになるそうです。つまり、悪口は実効性のある制裁なのです。

前に紹介した、ネットいじめの対象となった高校生は、部活動を休んだことがきっかけで、いたずらメールが来るようになりました。ということは、最初にいたずらメールを送りはじめたひとは、部活動を休んだことへの制裁のつもりだったのかもしれない。

また、悪口祭では暗やみにまぎれて悪口を言いあい、ザットナでは複数の子どもがいっしょに悪口を言って、終わるとばらばらに別れてどこかへ行ってしまいます。つまり、だれが悪口をはいたのか、言われたひとはわからない、というわけです。①この点でもネットいじめと共通します。

このように考えると、ネットいじめは現代に復活した悪口祭と言えそうな感じがしてきますが、両者には相違点もあります。特徴的な違いは、効果の点と、悪口祭にはいろんなルールがある点です。

たとえば、制裁としての効果という点で、悪口祭やザットナは実効性があります。悪口の対象となったひとは行動を改め、秩序を守ろうとするのです。それにたいして、ネットいじめの場合、制裁を加えるだけで、いじめの対象者には、何が悪くていじめられるのかわかりません。だから、どのように行動を修正すればよいのかも理解できないのです。そういう意味で、ネットいじめに制裁としての実効性はあまりないと言えるでしょう。

また、悪口祭やザットナは、年に一度、決まった時間に決まった場所でおこなわれます。そして、「これは祭かぎりのもの、この場だけのもの」という了解りようかいが参加者には共有されていました。それにたいして、ネットいじめはいつでもどこでもおこなわれ、いつまでも続くようです。

悪口祭は、神社でおこなわれます。それは、、と共同体のメンバーが理解していることを意味します。神様が注意している」という設定になっているのです。一方のネットいじめには、そのような存在はいません。

さらに、悪口祭の場合、悪口の内容にルールがあります。たとえば、最勝寺悪口祭では、犯罪や病気を意味することばがB句だったそうです。一方、ネットいじめでは、そういったルールやタブーはないでしょう。

このように、悪口祭やザットナに制裁としての実効性があり、^②悪口を言うひとびとがルールを設定して、無規範状態むきはんにならないのはなぜでしょうか。

わたしの推測すいそくにすぎませんが、それは他者を攻撃こうげきすることが、完全に悪いこととは考えられていなかったからです。攻撃は必要なときもある、と近代以前の日本人が考えていたから、というのがわたしの答えです。

悪口が社会の中で、いつでも否定的な存在ひていてきだったかという点、そうとは限らない。人類社会の歴史を繙ひもといてみると、多くの社会では悪口というものに、一定の社会的役割ややくわりが与あたえられていた。(中略)相対的に言えば、近代文化の成立以降、悪口が社会の片隅かたすみや日陰ひかげに追いやられるようになったという傾向性は指摘ししてきできるだろう。(中略)人間の社会には、長い歴史の間に培つちかわれてきた「智慧ちえ」の伝統がある。それは主として人間同士の関係をいかに築き上げ、いかに維持いじしていくか、あるいはお互いの葛藤かつどうをどのように処理しよしていくか、といった事柄ことがらに関する「智慧」である。しかし、最近の社会現象を見ると、どうもそうした「智慧」

が、うまく継承されなくなっているのではないかと懸念を感じる。誰が発明したというわけでもなく、誰が伝えたというわけでもなしに、社会に継承され蓄積されてきた「智慧」。(中略)「悪口」というのも、実はそうした「智慧」の一つなのだ。

(山本幸司『悪口』という文化』)

山本のこの主張にあるように、攻撃としての悪口は、ひとつの文化的・伝統的・智慧です。それがルールによって規定され、効果・効力のある智慧となりえたのは、攻撃はときには必要なのだ、という現実的な認識をひとびとが共有していたからだ、わたしは思います。

i、悪口という攻撃がいつも善い効果を発揮するとは、昔のひとでも思っていないかもしれません。悪口を言われたときの不快な気持ちを、ちゃんと理解していたでしょう。有効だし必要だけれども、むやみに使うものではない、ときちんと理解していたので、悪口は文化となりえ、暴走することもなかったのです。

ii、ネットいじめが無規範になるのは、やさしさ社会だからです。やさしさ社会では、攻撃は完全に「悪」で、徹底的に排除すべきものとなっているからなのです。

iii、現代日本人も悪口の制裁機能について気づいているはずですが、だから、日常生活で、ひとつの秩序維持機能としての悪口に、有用性を感じていると思います。

けれども悪口は「悪」ですから、公 C とは使えません。でも、使いたい。この葛藤の結果、^③悪口の使用法が屈折してしまうのです。しかも、抑えが効かなくなりがちなのです。その典型例がネットいじめなのは、言うまでもないでしょう。

部活動を休んだことが善くないことだったのなら、面とむかつてそう言えばいいのです。しかし「部活動を休むな！」と口にだして言うことは攻撃になってしまおう、と当人は思うのでしょうか。やさしさ社会では、面とむかつての攻撃は、タブーです。だから言えません。しかし、休むのは善くない、ということはいいたい。葛藤するうちに、だんだん休んだひとへの怒りが大きくなります。その怒りは、相手からはみえない場所からの攻撃となつて爆発するのです。そして裏サイトに悪口を書きこんだり、いたずらメールを送るよう掲示

板で誘います。ここに「ノリ」良く、便乗していつしよに誹謗中傷してくれる匿名の仲間が登場し、一時的に盛りあがってくると、もう抑えることは困難になるのです。

攻撃は絶対悪と決めつけた、やさしさ社会だからこそ、このような抑制の効かない攻撃を生んでしまう。この皮肉な現象を少しでも減らすには、攻撃の、限定的で条件付きの有用性・必要性を認識しなければなりません。そうすれば、コントロールの効かない攻撃、意味のない攻撃は減るだろうと推測できます。

ますますやさしい社会になろうとしている現在、あるいはますます「楽しければそれでいい」と考えるひとが増えている現在、むやみに攻撃の有用性を唱えることはとても危険です。それに便乗して、攻撃をエスカレートさせるひとがあらわれると予想できるからです。だから、^④むずかしい課題ではあると思います。

それでも、やさしさ社会の陰湿な攻撃を少しでも減らすには、条件付き攻撃の必要性を多くのひとが認識して、文化としての「智慧」を継承していくのが、大切なことだと思ふのです。

(森真一『ほんとはこわい「やさしさ社会」より)

(一) 〓 線部1「暴走」、2「便乗」、3「唱える」の読み方を、それぞれひらがなで答えなさい。

(二)

A

 \searrow

C

 に入れるのに最も適当な漢字一字を、それぞれ答えなさい。

(三)

i

 \searrow

iii

 に入れる語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア：… \langle i まさか ii さらに iii 本当は \rangle

イ…へi ただし ii 逆に iii じつは

ウ…へi だから ii 一方で iii そもそも

エ…へi しかし ii それでも iii つまり

(四) ——— 線部①「この点でもネットいじめと共通します」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 悪口を言う伝統的な行事とネットいじめとは、ひとりでは勇気がなくて加えられない制裁を、大勢の人に力を貸してもらって効果的に加えることができるという特徴とくちようが共通しているということ。

イ ネットいじめでは制裁する側とされる側とが固定されておらず、立場を入れ替かえながらたがいの問題点を指摘しあうが、伝統的な行事でも実際に悪口を言い合うことで同様のことを行っているということ。

ウ 悪口を言う伝統的な行事は、悪だくみの存在を周囲にあばき、制裁を加えることを目的とするが、ネットいじめでも、不特定多数に情報が広がることにより、同様の目的が果たされるということ。

エ 悪口を言う伝統的な行事もネットいじめも、ともに間違まちがった行いに対する制裁という意味あいがある点と、その制裁を加えたのが誰なのかわからないようになっていた点とが共通しているということ。

(五) に入れるのに最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「神様」という超越ちようえつてき的で強い力は、町の浄化じようかにこそ向けられるべきだ
- イ 「神様」という神聖しんせいで超越的な力を悪口は代理・代表している
- ウ 「神様」という尊とうとい存在は、純真じゆんしんな子どもの口を借りて語りかけてくる
- エ 「神様」という神聖な力はどのような悪人でも屈服くつぷく・改心させる

(六) ——— 線部②「悪口を言うひとびとがくなぜでしょうか」とありますが、この問題に対する筆者の考えとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 近代以前の日本人は、必要な攻撃であっても、ルールに従したがっていないければ有効なものにならないとわかっていたと考えられるから。
- イ 近代以前の日本人は、悪口による攻撃が秩序の維持になくてはならないということを、現代人以上に理解していたと考えられるから。
- ウ 近代以前の日本人は、攻撃を行う場合には、きびしいルールに基づもといて行う必要性があることを知っていたと考えられるから。
- エ 近代以前の日本人は、悪口は完全に悪いことではなく、むしろ必要に応じて行わなければならないと認識していたと考えられるから。

(七) ——— 線部③「悪口の使用法が屈折くつせつしてしまう」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人への攻撃は善い効果を期待して行うものなのに、人を不快にして楽しむだけの者も存在するという事。
イ 人への攻撃は絶対悪だと決めつけられたことに開き直って、更に悪質ないじめを繰り返す者が増えたということ。
ウ 面とむかって人を非難することができず、みえない所で必要以上に激しく攻撃するようになるということ。
エ 面とむかって人を非難することができず、陰でこそ悪口を言うことでしかうつぶんを晴らせないということ。

(八) ——— 線部④「むずかしい課題ではある」とありますが、この課題を解決するにはどのようなことが大切ですか。次の文の

I

III

に入れる表現を、それぞれ本文中から抜き出して答えなさい。ただし、

I

は十六字、

II

は二十字、

III は九字とし、句読点や記号も字数にふくめます。

I

をきちんと理解した上で、

II

を認識し、攻撃の暴

走を防いでいた近代以前の日本の III を、正しく受け継いでゆくこと。

「そや」と優作がうなずく。「こんなところ中学までおれるか。俺ははよ村外に出たいんや」

優作も愛梨も、早く十津川を出たいらしい。どうして二人とも十津川が嫌いなんだろう？ 十夢にはそれが切なくてならない。そして、いつもの **A** わだかまりを口から漏らした。

「……廃校の決定つてくつがえらんのかなあ」

優作が不快そうに返した。

「おまえまだそんなこと言ってるのか。くつがえるわけないやろ」

「そんなんわからんやん」と十夢がむっとした。「優ちゃん、どうしたらええと思う？」

「ほなら村長に頼めよ」と優作が **B** 投げやりに言った。「田中正造みたいに直訴状持っていけよ。廃校止めてください。お願いします、つてな」

足尾銅山の公害事件で、当時の天皇陛下に直訴した人物だ。社会の教科書にそう載っていた。たしかに直訴すれば、村長も聞き入れてくれるかもしれない。

十夢が感心の息を吐いた。

「……それええね。優ちゃんも一緒に行ってくれる？」

「いつ、行くわけないやろ」

十夢が素直に受け入れたので、優作の舌がもつれた。それから急に怒りをあらわにした。

「おまえ、ええ加減にせえよ。学校なんかいつかなくなるもんやろ。何をいつまでもぐちぐちとこだわつとんねん。過去にしがみつくなよ」

その剣幕に十夢は **b** を丸くした。優作がそこまで激昂するとは思わなかった。ただその驚きはすぐに怒りへと転じた。

十夢が反発した。

「なんでやねん。学校なくなつて平気な優ちゃんの方がおかしいやろ！」

と十夢が優作の胸をこづいた。何すんねん、と優作が十夢の襟元をつかんだ。

② その騒動を聞きつけたのか、

「どうしたん。二人とも」

とよし太が部屋に踏み込んできた。「なんでもない」と二人で声をそろえてごまかした。それと同時に布団の中にもぐり込む。

「そうなん、ほんま？」

とよし太はまだ疑っていたが、どちらも返答しない。「……じゃあ、おやすみ」とよし太が蛍光灯を消した。

修学旅行も終わり、またいつもの生活に戻った。

あの日以来、十夢と優作はまだ険悪だ。どちらも一言も口を利かない。二人ともどうしたん、と愛梨は [c] をひねっていたが、仲立ちは一切しなかった。ライブでまたアイドル熱が過熱したのか、NMBのこしか口にしない。

よし太も香澄も二人の不仲を察している雰囲気だったが、特別何も言わなかった。もう少し様子を見るつもりなのかもしれない。十夢としてもその方がありがたかった。

教室に入り、十夢は日めくりカレンダーをめくった。今日も日直だ。

『卒業まで残り270日』という文字と、ビルの壁面に唇のふ厚い人の顔が描かれている。『くちビル』だそうだ。

あと九か月……まだ間に合うはずだ。

十夢は心を固めた。

夜になり、十夢は子供部屋に閉じこもった。社会の教科書を開くと、ヒゲを生やして着物を着た老人の写真が載っていた。これが田中正造だ。

それを見ながら、十夢は机のひきだしから封筒をとりだした。そこにペンでこう書いた。

『直訴状』と……

翌々日の日曜日。

十夢は窓から空を見上げた。山の稜線がはつきりと見えて、青空がどこまでも広がっている。梅雨の季節だが、幸いにも晴れてくれた。

クローゼットからリュックをとりだした。遠足用のリュックだ。タオル、下着、靴下、着替えの服、水筒、防虫スプレー、傷薬、ばんそうこうを入れる。体操服に着替え、帽子をかぶる。動きやすい服といえはこれしかない。

リビングには誰もいない。家族は和歌山の新宮に出かけている。十夢は水筒に麦茶を注ぎ、水を入れた。さらに『優ちゃんの家に行つてきます』と壁のホワイトボードに書き込んだ。もちろん嘘だが、これで夜までは自由に行動できる。

家から出てすぐに首を左右にふり、あたりの様子を探る。まずは集落から離れよう、と小走りで駆けぬける。そのときだ。

「十夢くん、どこ行くの？ 体操服なんか着て」

十夢はぎくりとして、斜め上を見やった。この方向への警戒を怠っていた。

よし太が鼻をほじりながらこっちを見ている。

「えっ、うん、ちよつと」

③と十夢は言い淀んだ。もう主要道路に出ている。愛梨や優作の家とは逆方向だ。二人のところに遊びに行く、という言い訳は通しない。ここの子供は一人で集落の外に出ることはない。車がいるため、大人の付き添いが絶対に必要だ。

十夢はあきらめて坂を登り、よし太に近寄った。よし太が不安げに尋ねてきた。

「二人でどこか行くつもりやったん？」

十夢は正直に打ち明けた。

「……村長さんのところに行くつもりやった」

「村長さん？ なんの用事ですか？」

とよし太が当惑気味に尋ねる。

「廃校をやめて欲しいって直訴しに行く。田中正造みたいに」

「田中正造って……足尾銅山事件の?」

十夢は小さくうなずいた。

よし太は顎を触って何やら考え込んでいる。そして、真剣な声で申し出た。

「ほんなら僕も一緒に行くわ」

「えっ、ほんまに」

てつきり止められると思っていた。

「うん」とよし太が首を **d** にふる。そして側にあつた自分の車のドアを開け、十夢をうながした。「十夢くん乗って」

十夢がかぶりをふる。

「よし先生、僕歩いていきたい」

「えっ、なんで」とよし太が目を大きくした。「村長さんの家って湯泉地温泉の近くやろ。歩いたらめっちゃ遠いで」

④ それは十夢も承知している。村長宅は、ここから車で一時間はかかる。徒歩で訪れるような場所ではない。でも、十夢は自分の足で歩きたかった。

十夢が **C** 折れないと踏んだのか、よし太は車のドアを閉めた。

「わかった。じゃあ一緒に歩こう。僕も付き合うわ」

その拍子に、となりの家から香澄があらわれた。手には洗面道具を持っている。温泉に行くつもりなのだ。香澄の温泉好きは、この集落で知らない者はいない。

よし太が事情を説明すると、香澄の目に動揺の **e** が浮かんだ。その瞳のまま十夢を見つめてくる。十夢は気まずくてうつむいた。

「……ってことなんで今から十夢くんと行ってきます」

よし太が話し終えると、香澄が即決した。

「だったらわたしも一緒に行きます。ちよつと待っててください」

とこちらの返事も待たずに踵を返し、家へと逆戻りした。

少し経ってから香澄が出てきた。帽子に赤いウインドブレーカー、ショートパンツにスポーツタイツ。背中にはバック。バックを背負っている。本格的な山歩きの格好だ。

「さあ、行きましよう」

と香澄がいきなり歩きはじめ、よし太と十夢はあわててそのあとにつづいた。

三人で山道を歩く。ふだん狭いと感じているこの道が、歩くと広く感じる。ガードレールがあるとはいえ、その下は谷底だ。片時も気はぬけない。

しばらくすると額に汗がにじみはじめた。晴れているが梅雨の時期だ。湿気で体力がうばわれる。

よし太はジャージを脱いで、Tシャツ一枚になっている。背中が汗で濡れていた。

変わらない景色の中を黙々と歩く。アスファルトの道と山しか見えない。ときどき対向する車やバイクぐらいしか、景色に変化がない。十夢は腕時計を見た。まだ一時間も経っていない。気が遠くなりそうだ。

下り坂を一步一步踏みしめながら歩くので、足に力を込めなければならない。十夢は肩で息をしはじめた。

よし太がそれを察した。

「ちよつと休憩しようか」

十夢は無言でうなずいた。もう声を出すのもしんどい。

三人でバス停のベンチに座る。念のために時刻表をたしかめたが、しばらくバスは来なかった。

十夢は水筒に口をつけた。冷えた麦茶が喉を潤し、全身にしみわたった。生き返った気分だ。

よし太がうらやましそうにこちらを見ているので、十夢は水筒をさし出した。

「よし先生、いる？」

一度生唾を飲み込んだが、よし太は断った。

「ううん。それ十夢くんのやつやから、ちゃんと残しとき」

香澄がバックバックから水筒をひとつとりだし、それをよし太に手渡した。

「仲村先生、よかつたらどうぞ」

「いいんですか、香澄先生」とよし太が目を輝かせた。

「わたしの分もありますから」

と香澄はもう一本の水筒をとりだした。さすが香澄先生だ。あの短時間ですべての準備を整えてきたのだ。

よし太はむしゃぶりつくようにそれを飲み、おおげさに褒めたたえた。

「うまい！ 香澄先生の作る麦茶めっちゃ最高ですね。こんなうまい麦茶飲んだの生まれてはじめてです」

「……それ、ほうじ茶ですけど」

と香澄は冷たく訂正すると、水筒に口をつけた。

休憩のおかげでひと息つけた。十夢は見るともなく景色を眺め、ぼつりと漏らした。

「……なんでみんな廃校になるのが平気なんだろう？」

よし太と香澄の顔色が変わったが、十夢はかまわず本心を吐露した。

「みんな学校なんてどうでもいいのかな？」

「そんなことないよ」とよし太が大きな声で否定した。「そんなこと絶対ない……」

と強調するように二度くり返す。よし太らしくないもの言いだ。

「とてもそうは思えないけど……」

と十夢は譲らない。現に誰も廃校を防ごうとはしなかった。自分しか学校を守る人間はいない。

よし太は少し間を空け、おもむろに言った。

「十夢くんは京都から十津川に来たでしょ。だからよけいに十津川の良さも谷川小学校の良さもわかるんよ。僕も同じ経験したことあるから」

⑤ 十夢はびつくりして訊き返した。

「よし先生ずっと十津川に住んでるんじゃないの？」

「ううん。じつは小学校の頃、大阪に引っ越してその学校に少しだけ行ってん」

知らなかった。一護や恵子からも聞いてない。

「じゃあ転校されたんですか？」

と香澄も意外そうに眉を上げた。よし太がうなずいた。

「そうなんです。でもその大阪の学校になじめなくてまた谷川小学校に戻ってきたんです。だから十夢くんの気持ちめちゃわかるんですよ。村の外からこつちにくると、あらためてこのよさがわかるんです」

なじめなかったというその言葉が、十夢の記憶をゆり起こした。ふと、京都の学校を思い返した。

当時の十夢は学校嫌いだった。友達にはいたが、親友と呼べるほど親しくなかった。先生も忙しそうで、話しかけることすら遠慮していた。あそこでは、友達も先生も遠く離れていた。学校にいる間、十夢はいつも孤独さを感じていた。

でも谷川小学校は違う。愛梨、優作は親友だ。よし先生、香澄先生にはどんなことでも話せるし、甘えることもできる。今日だって、^⑥ 自分のわがままに二人が付き合ってくれている。

谷川小学校では笑顔が絶えない。学校に行くことが楽しくて嬉しくて、毎日わくわくしている。

ここは、この学校は、僕の宝物だ。

だから、だからこそ、この学校はずっと残っていて欲しい——

目頭が熱くなり、十夢は懸命に涙をこらえた。幸いにも、よし太と香澄は気づいていない。

(浜口倫太郎『廃校先生』より)

(一) 〓 線部A「わだかまり」、B「投げやり」、C「折れない」、D「見るともなく」、E「おもむろに」の意味として最も適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を繰り返し用いてはいけません。

ア 見えていても見えていなくてもどちらでもよい

イ あらゆることがむなしく感じられてしかたがないこと

ウ 心の中にかくしている思い
オ 心の中の晴れない思い

キ もうどうなってもかまわないといった態度をとること

ケ とくに意識して見るというわけでもなく見る様子

エ どんなに苦しくても弱気にならない
カ ていねいに

ク 人がどう言おうとも意見や主張を変えることがない

コ ゆっくりと

(二)

a	e
---	---

 に入れるのに最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を繰り返してはいけません。

ア 手 イ 前 ウ 目 エ 腕 オ 横 カ 色 キ 顔 ク 水 ケ 縦 コ 首

(三)

——線部①「十夢は一旦躊躇したが、思い切って言った」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 十夢は自分の願いを聞き入れてもらえるかどうか不安はあったけれども、優作が中学受験をやめれば、小学校は廃校にならずに済むのではないかと考え、協力を求めた。

イ 十夢には自分が言っつてよいことなのかどうかわからなかったが、中学受験に嫌気がさしている優作を受験勉強の苦しみから救ってやりたいという思いがつのり、中学受験をやめるよう勧めた。

ウ 十夢は自分の考えを伝えるかどうか迷ったけれども、中学受験をやめて地元の学校に行こうと優作に勧めるのは今だと決意し、それを率直に伝えた。

エ 十夢は自分が優作にしてやれることは何かを考えた末に、彼の本心とはまったく反対のきつい言葉をかけて、中学受験に対して弱気になっている親友のやる気を引き出そうとした。

(四)

——線部②「その騒動」とはどういうことですか。二十字以内で答えなさい。ただし、句読点や記号も字数にふくめます。以下の問題も同様です。

(五) ——— 線部③ 「十夢は言い淀んだ」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア よし太先生に自分の計画を正直に話してしまうと、自分の計画が反対されて実行できなくなることがわかっていたので、なんとかごまかそうとしている。

イ だれにも見つからないで集落の外へ出るつもりだったが、思いがけずよし太先生に見つかってしまい、どんな言い訳をすればよいかわからなくなってしまった。

ウ もう少して集落の外に出られるところまで来たのによし太先生に見つかってしまい、これで計画はあきらめなければならぬのかと絶望的になっている。

エ よし太先生は信頼できる人だけれども、自分の計画を聞いたらきつとやめさせられると思った十夢はうそをついてごまかそうと思ったが、良心がとがめてできないでいる。

(六) ——— 線部④ 「それ」とはどういうことですか。二十字以内で答えなさい。

(七) ——— 線部⑤ 「十夢はびっくりして」とありますが、十夢がびっくりした理由を二十字以内で答えなさい。

(八) ——— 線部⑥ 「自分のわがまま」とは具体的にどういうことをさしているのですか。それを示している一文を本文中から探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。